

2024「ことばの森教室」第3回優秀作品紹介

< 中学校1年生 > 作文課題「初めての学園祭を経験して」

1-① 「初めてのことも仲間と一緒になら」

「バサッバサッ」全校対抗競技の時に、旗の力強い音がした。私はその旗を見ると、清々しい気持ちになった。この旗は、私が担当したクラス部門が手がけた1年B組だけの特別な学級旗だ。

1年生は初めての学園祭に参加し、とまどうことや難しいことが山ほどあった。そんな中、2年生や3年生の先輩が優しく丁寧に教えてくれた。私は学級旗の担当になり、旗をアクリル絵の具で塗る作業を任された。細い字を書くのが難しかったが、ゆっくり集中して塗っていった。4日間同じ作業の繰り返しで飽きてしまった時もあったが、そんな時先輩が声をかけてくれた。「あと少しで完成だから、もう少し頑張ろう。」私は、「はい、引き続き作業頑張ります。」と返事をした。声をかけてもらったことが嬉しくて、再びやる気が湧いてきた。「あと、もう一息頑張ろう。」と友達に声をかけた。どのクラスよりも、一番速く学級旗を仕上げる事ができた。

学園祭当日に、全クラスの学級旗が一堂に集まった。どの学級旗も気持ちが込められていたが、私にとっては自分たちのクラスの学級旗が一番輝いて見えた。体育館に飾られていて、誇らしく思った。小学校の時と比べると、生徒が自ら計画を練り、実行することが多くなり驚いた。初めてのことも一人ひとりが役割を果たし、一つの目標に向かって歩んでいくと、大きな結果に繋がると実感した。

1-② 「学園祭で得たもの」

私の通う学校では、毎年恒例の学園祭という行事がある。一日しかないけれど、特に私が力を入れたのは劇だ。なぜなら、私は兄の劇を見たことがあり、その時の役者一人ひとりの顔が笑顔で、とても楽しそうだったからだ。だから今度は自分が役者になって、観客の人達を楽しませると決めてい

た。

夏休みに入る前、いよいよ劇のタイトルが決まり、その役者決めがあった。タイトルは「屋根裏チュー学校」。あらすじは、とある屋根裏にあるネズミたちの学校、机も椅子もなく、教師は生徒達が交代でつとめている。校長も1ヶ月毎に交代する。ちょっと変わった学校だ。しかしある日、屋根裏チュー学校にマウス学園による吸収合併の危機が訪れる。1年生のほとんどが役者になって、大活躍をする。ワクワクした。私は、ネズミ役の役者に立候補した。役者だけではなく、照明の担当、音声の担当、大道具、小道具の担当、そして監督担当がある。道具担当の人達と衣装の打ち合わせをしたり、夏休みにはセリフを覚えたり、当日直前まで全員がそれぞれの仕事を一生懸命にやった。その成果が当日は最大限に出すことができ、忘れることのない一生の宝になった。

今回の劇では、「クラス」というものがとても感じられた。そして、協力することの大切さ、絆がより深まったことで、来年の劇の準備にも力を入れていきたいと思った。学んだことをこれから生かしていきたい。

1－③ 「大丈夫、僕ならできる」

「これ、やってみたい。」去年、兄の学園祭を見に行き、2年生の先輩がヲタ芸をしていた。その先輩は、僕が入学しても3年生で学校にいる。だから来年、この先輩と一緒にやると決めた。

今年も学園祭の季節になった。先輩に「一緒にヲタ芸をしたいです。」と言うと、「OK」と言ってくれた。見ているだけだと、簡単だと思ったが、やってみると意外とできない。振り付けや立ち位置が、なかなか覚えられない。そんな時先輩は、「去年の僕もできなかったよ」や「覚えるのが速いから頑張って」と優しい言葉をかけてくれた。そんなこと言われたら、頑張る以外に選択肢はない。とにかく必死に頑張って追いついた。

いよいよ本番が来た。ヲタ芸は学園祭のラストで、リレーの後だった。リレーを本気でやりすぎて、保健室へ行くほど頭がくらくらした。今までの練習を無駄にしたくなくて、本番へ臨んだ。先輩とのラスト演技だから、本気でやった。すると、会場の人から拍手がきた。本当にうれしかった。

本番の後、学園祭を見に来ていた小学生から「一緒にやりたい」と言われた。僕も誰かに影響を与えることができてうれしかった。だから来年は、僕が先輩のように後輩に教えてあげたり、振り付けや立ち位置を考えたりして、ヲタ芸を頑張っていきたいと思った。

< 中学校 2 年生 > 作文課題

「もしもあなたが宇宙人だったら、今の地球を見てどう思うか」

2 - ① 「私がもし宇宙人だったら、今の地球は・・・」

私がもし宇宙人だったら、「今の地球は悪いところと良いところがある」と思います。

まず、悪いところは、人と人とが争い戦い、戦争などをしていることです。なぜ、人と人が争うようなことをしているか不思議になります。同じ人類で争い合うのですから。他には、地球温暖化です。人間達が、自分たちで自然など大切なものをこわしています。それなのに、目標を立てても達成できていません。人間達は、自分たちで壊してきたものも直せないのです。地球は、人間関係や自然を大切にしない悪い生物であり、不思議に思います。

次に、良いところは、文明がどんどん進化し、生活しやすい環境になっていっているところです。機械などの技術や経済についてなど、色々な面で発展（進化）していると思います。他には、人同士が協力して色々なことを達成していくことです。小さなグループから大きなグループまで、人それぞれの個性を持ち、協力しています。地球には、人それぞれが個性を生かして、楽しく日常を過ごしている人が多くいることがいいところだと思います。

地球には、悪いところ、良いところがそれぞれたくさんあります。だから、地球は不思議で興味深いです。もっといい地球にしていくには、「協力」が大切だと考えます。

2－② 「宇宙人だったら私は」

「今の人間達は何をしているんだ。」私はそう思います。戦争、いじめ、詐欺、犯罪などが続いていて、そして増えてもいるからです。

私は絶対そんなことよりも、人の役に立ったり、まじめに仕事や学校でいい成績を取ったりとか、もっとやるべきことがあるのではと思います。しかも、その方が周りの人にとっても自分にとってもいい思い出として残ると思います。

今、より良い地球を目指して、色々な対策が行われています。例えばニュースなどで呼びかけをしたり、、注意書きのポスターなどが町の掲示板に貼ってあったりします。でも、国や県、町がこのような取り組みをしても、自分自身がしっかり意識しないと絶対により良い地球にはできないと思います。

だから、一人ひとりが行動を見直したり、しっかりみんなで協力したりしていけば、もっとより良くなっていく。学校生活や日常生活でも、ルールやマナーを守ったり、みんなと協力したりしていこうと思います。

2－③ 「地球に生まれた者たちへ」

私はとても激怒している。なぜなら人間という生き物が、自分たちが都合のいいように地球を変えてしまっているからだ。私の住む星では、様々な生き物が共存しそれぞれが生きやすいように助け合い暮らしている。しかし、この地球という星は、人間という生き物が自分たちの欲求を満たすために、

他の生き物を平気で殺し、食べて、ゴミを出す。なんて身勝手なのだろう。

ある国では、人間同士が争っている。多くの人間が死んでいく。何がしたいのか理解できない。同じ星に生まれた仲間で仲良く暮らせばよいのに、そんな簡単なことができない人間は愚かだ。またある国では、地震という自然の災害で家の下敷きになった人間を助けたり、食べ物を分け与え合っている。自分自身のためだけにしか生きていけない生物でもないようだ。

文明もそれなりに発展し、争い事もなく、食べ物に困っていない国があった。山や川の自然が美しい。私の星にはない景色だ。みんなが笑顔で生活している・・・と思ったが、よく見ると一人ひとりの心の中に、幸福感が感じられない。ゆとりがなく、無我夢中で必死に頑張っている。私は、人間の見える部分が全てだと勘違いしていた。日本の人々は、税というもので生活に追われている。人間も人間なりに大変な生き物なのだ。

私は今の星に生まれ、皆が仲良く争いもない平和な星でよかった。もう地球という星に来ることはないだろう。

2－④ 「抱える悩み」

私たち人間が生育する地球における課題は、環境問題であると思う。地球温暖化や大気汚染、森林破壊など様々な問題が私たちを脅かしている。これらの問題は、人類の行動によって引き起こされており、解決策を見つける必要がある。

まず、個々の行動が環境問題に与える影響を考えることが重要である。無駄なエネルギー使用やプラスチックの大量消費など、日常生活で気をつけるべき点は数多くある。また、地球全体での取り組みが必要不可欠な問題もあるため、国際的な協力を大切にしていけると良いと思う。

環境問題は、私たちの問題だけではなくこれからの世代にも影響を与える重要なテーマだと思う。

今のうちに行動を起こし、環境を守る取り組みを積極的に行っていくことが、私たちの使命である。

自らが行動を起こすためには、エネルギーの無駄遣いを減らすことを目的として、節電や省エネの取り組みを行うことが求められる。また、リサイクルの徹底や持続可能な資源の利用も重要である。

各国が連携し、排出量削減という目標を共有することで、地球規模での環境保護が実現できるだろう。

私たちはこの地球に住む一員として、これらの問題に責任を持つことが求められるのである。持続可能な未来を築くために、今日から行動を起こすことが必要不可欠である。

2－⑤

「もったいないの減少」

「もったいない。」もし私が宇宙人であつたら、今の地球を見てそう言うでしょう。食べ物に関しても、プラスチックに関しても、この地球ですら「もったいない」と思ってしまう。今の世界では、森・海・町は私たち人間が汚したゴミがありとあらゆる所に散らばっている。特に、ビニール袋やプラスチックをポイ捨てして海に流れると、ウミガメや魚が餌と間違えて食べてしまう。それに最終的にプラスチックを食べた魚を私たち人間は食べているから、人間の体も悪くなってしまう。

それに食べ物、本当にもったいない。だって、好き嫌いや作りすぎ、動画のために食べ物無駄にしていることがあるけれど、世界には自由に好きに食べ物が食べられない国だってあるんだ。輸出してしまうから全部持って行かれて、お金は上の人に渡される。働いている人のお金はあまり多くないから、そこの所をよく考えて、美味しいご飯が毎日食べられることに感謝していきたい。それに、この地球は人間だけのものではない。動物や植物などのものもあるから、簡単に自然を壊して動物の住み家をなくしたり、絶滅させたりしたら、どんどん地球は悪くなっていくから。

たまには宇宙から地球の課題を探していくと、他人事でもない。人間だけの問題ではないなということも分かった。これからの生活、「もったいない」を減らすことで、人も動物も過ごしやすい地球

になると思う。

2－⑥

「どっちなのか地球人」

「この惑星の人間は・・・」このセリフは、コーヒーのCMに使われているものだ。今回の作文の課題を見た時に、このコーヒーのCMが頭に浮かんた。宇宙人のジョーンズが、地球調査員としてこの地球で様々なことを調査するという設定のCMは、「この惑星の住人は・・・」と言いながら地球のことを面白おかしく表現している。過去のCMを何本かユーチューブで見ている中で、なるほどと思ったものがあった。

「この惑星の住人は、物欲に支配されているようだ。生きるために必要なものなど、そんなにはないはずなのに・・・」その通りだと思った。この宇宙人ジョーンズが感じたように、もしも自分が宇宙人であっても同じように感じるはずだ。地球人はなぜこんなにも物欲に支配されているのだろうか。それは、「素晴らしいものがこの地球にはあふれているから・・・。」そう思わずにはいられない。地球が進化すればするほど、欲しくて欲しくてたまらない物が増えていく。宇宙人は、地球は物であふれているなと思っているだろう。それは素晴らしいことであると思う。しかし、本当に必要な物を見極められる目を育てられれば良いのにとも思っているのではないだろうか。そして、物があふれている地球の中にも、本当に必要な物すら手に入れない人がいるということに、物欲に支配されている人々は気づくべきなのだ。

今の地球を見ている宇宙人は、こう思うだろう。「賢いのか、賢くないのか、どっちなのか地球人。」

< 中学校 3 年生 > 作文課題「金子みすずの詩を通して考える人間関係の結び方」

3－①

「詩を通して考える人間関係の結び方」

作文の課題になった「金子みすず」の詩。「こだまでしょうか、いいえ誰でも」公共広告 A C ジャパンの CM を携帯で見ました。ナレーターの今でも泣きそうな声に合わせて読まれていました。泣きそうになりました。CM の最後に「やさしく話しかければ、やさしく相手も答えてくれる」で CM は終わりました。人は、私の言葉や行動、態度で相手も答えてくれるので、自分以外の誰にでも優しく接すれば、やさしく接してくれるのかなと思いました。

2011 年東日本大震災が起きた時、まだ 2 歳だった私は覚えていません。しかし、その一方で今でも記憶に残っている人もいます。大事な家族を失った人もいて、人間関係を結ぶ上で協力的になれない人もいます。だから今でも、この CM は流れ続けてもいいと思います。

今の時代を生きている私たちは、誰でもが協力し合って生きていかなければなりません。この世に生まれて、15 年経とうとしています。色々な人に出会いました。そして、たくさんのことを学びました。とてもたくさんの出来事があり、楽しさやうれしさ、悲しさ、悔しいこと、様々な感情と共に生きています。感情があるからこそ、生きていく上で協力し合いながら、人間関係も成立しながら生活し合っているのだと思います。人々は、協力し助け合う力があるから思い出が増えるのだと思います。

3-② 「対等な人間関係」

この詩を読んで、誰に対しても誠実に接する対等な人間関係を結んでいくべきだと考える。この詩を読み、自分の相手に対する態度によって、相手の態度も変わってしまうということを感じた。自分の発した言葉に責任を持つことが大切だ。

自分の発した言葉や態度によって、相手の態度が変わってしまうことは当然のことだ。人間は、嫌な言葉や態度をとられた人に、良い印象を持たない。その結果、相手も不快な言葉を言ったり、態度をとってしまったりすることになる。だから、相手と友好的で対等な立場を築くには、言葉や態度に

責任を持つことが必要だ。

誠実な関係を築いていくには、相手のことを思いやる心をお互いに持つことが大切だ。思いやりの心を持つことで、お互いが相手を大切にできる人間関係が生まれ、誠実な関係を築くことができるはずだ。

誠実で対等な人間関係を築くことができれば、多くの人と関われるようになり、さらに豊かな人間関係をつくっていくことができる。多くの人と関わっていけば、様々な人の考えを聞き、視野を広げることができる。視野を広げていくことで、現在のグローバルで多様性の社会でも、様々な考えや人達を受け入れ尊重することにも繋がっていく。誠実や平等といった考えを、一人ひとりが持ち、相手を尊重していけるような人間関係を結んでいきたい。

3－③

「本音と上辺の言葉」

人間関係の中で大切なのは、お互いの本音を言い合えることと、受け止め合えることだ。受け止めることができなければ、ただの言い合いになる。本音を言い合えなければ、上辺の人間関係に過ぎない。

金子みすずの「こだまでしょうか、いいえ、誰でも」という詩について考えたい。何かを言ったら全く同じ言葉が返ってくる様子を、こだまと表現した詩である。例えば「遊ぼうって言うと、遊ぼうって言う」という文がある。一見何でもない文だが、一つだけ疑問がある。「遊ぼう」と返している方は、本当に遊びたいと思っているのか、ということだ。本当は勉強したいのだけれど、断ると相手を傷つけてしまうから「遊ぼう」と返しているのかもしれない。他にも疑問に思う点はあるが、結局同じ問題に辿り着く。本当に言葉通りの感情を抱いているのか、と。

日本人は外国人から見て、自分の意見を言わないと言われることが多い。相手を傷つけないための

行動なのかもしれないが、外国人には本音と建て前がある思われることがある。また、自分の意見がないと思われてしまうこともある。一方、アメリカやフィリピンでは、自分の意見をはっきり言う人が多い。なぜ国が違うだけで性格に大きな差が出るのか。理由は、自分も相手も本音を受け止めることができるからだろう。本当の人間関係とは、先ず相手の本音を受け止めることから始まるものだ。

3－④ 「相手の気持ちも考えて」

「お互いに相手の声をきき合ってー」先生の一言にハッとした。私は小学一年生の時に、ジュニアコーラスという合唱団体のメンバーとなった。今では保育園生から高校生までの幅広い年代の子どもたちが一緒に歌っている。

昨年、クリスマスコンサートに向けて一丸となって、会場に来た人達に感動してもらいたいと練習していた。小学生の元気な歌声と、中高生のきれいな歌声のバランスをとることが難しかった。そして、自分が少しでも上手に歌いたい気持ちが前に出てしまい、周りの人の声がしっかりときけていなかった。そんな時に先生が、「自分の声だけでなく、同じパート違うパートやピアノの音にも耳をすませて、音を感じながら歌うのが合唱だよ」と指導してくれた。そして、ピアノの音色やハーモニーを感じながら歌った。とても気持ちが良かった。今までのモヤモヤが、スッと消えた。合唱は一人ではできないのだ。

自分のことばかりで、相手や周りが見えなくなってしまうのは、いずれ孤立していくだろう。人は一人では生きていけない。互いに共感し合ったり理解したりすることが、共に生活していく上で必要だ。そして、時には一歩下がって外から見ること、自分の思いもしっかり持つこともとても大切だ。

3－⑤ 「言葉の力」

「今思えば、日常生活の中にはこだましている会話ばかりだな。」今回の題材の詩を読んで、一番

最初に感じた。相手が言ったことをくり返していく会話に、意味なんかあるのだろうかと思えた。

ある日散歩をしていると、小学生くらいの子達が話しているのか聞こえてきた。「ねえ、遊ぼう。」
「うん遊ぼう。」と。小さい子って、どうして同じ言葉を言うのだろうと疑問に思えた。もしかしたら自分も、昔はそうしていたのかもしれないと思った。くり返し言えば、仲良くなりやすいのかなと考えた。しかし、決めつけるのは良くないなと思い、今回の題材の詩について、詳しく調べてみようと思った。調べた結果、自分の考えが間違っていることが分かった。繰り返しているのは、相手が「遊ぼう」と言ったら、言われた側が「遊びたい」と感じて「遊ぼう」と言うから、ということが分かった。この結果を知った時、思い出したことがある。それは、「言葉にも霊力である『言霊』という力がある。」という文章だ。まさにこの『言霊』が関係しているのではないか、という考えに到達した。

このように調べてみた結果、人が繰り返しものを言う理由が理解できたような気がする。そこから『言霊』の力を生かせるように、思ったことを口に出していくのが人間関係を結ぶ第一歩だと考えた。

3－⑥

「私なりの考え方」

「こだまでしょうか」「いいえ誰でも」この一節に聞き覚えのある人も多いのではないだろうか。
この詩は、2011年3月11日に起きた東日本大震災の後、テレビで繰り返し放送されたものである。

当時もこの詩を通して、改めて人と人とのつながりを考えさせられた人もいるだろう。私の中で大切にしている言葉がある。「言葉というものは、使い方を間違えると厄介な凶器になる。言葉のすれ違いで一生の友達を失うこともあるんだ。」最近、外を歩いていても当たり前のように誰かの愚痴が聞こえてくる。人間はたった一言で傷つくし、たった一言で微笑む。誰もが自由に発言したり、意見を言ったりするからこそ、使い方がとても重要になってくる。何気ない日常会話だったとしても、本人を不快な思いにさせてしまうリスクもある。このようなリスクで、たくさんの世の中を生きてい

る私たちにとって、友達とのケンカは切っても切り離せない存在だろう。もちろん私も、友達とのケンカはたくさんしてきている。しかし次の日には、仲直りができるように自分から話しかけるようにしている。

自分が優しく話しかければ、きっと相手も優しい言葉を返してくれる。そう信じて日々過ごしている。言葉は、人から人へと「こだま」する。当時のCMの内容であるこの一言が、私の考える人間関係の結び方である。

3－⑦ 「よりよい人間関係を」

私が一歳の頃、東日本大震災が起きた。金子みすずの「こだまでしょうか」は、震災後のテレビCMで幾度も流れたそう。先に見えない不安や絶望の中で、希望への願いも秘め、人と人との心の繋がりを願うこの詩は、聞く人の心に響いただろう。

この詩は、人と関わり、ケンカをし、絶交をする。でもやっぱり寂しくなって、人を求めて仲直りをする。という人と人との関わりの原点を表現している。大正時代に書かれたにもかかわらず、現代に聞いてもしっくりくるのは、どんなに時代が移り変わっても「コミュニケーション」の原点は同じということなのだろう。そして言葉は、良いことも悪いことも「心」を乗せて相手に運んでいるということを伝えてくれている。

私は小さい頃、「痛い痛い飛んでいけー。」をしてもらうのが好きだった。本当に痛みが軽くなるような感覚は今でも覚えている。もし「それくらい痛くない、痛くない。」と言われていたら、この安心感は味わえてなかっただろう。

同じ言葉が返ってくる「こだま」のように、心と心が通じればいいのだが、実際はそうならないことも多い。傷ついていても、それでもまた人との関わりを求めてしまうのは、誰もが人と通じたいと

願うからなのかもしれない。私も、相手の心に寄り添い、良い人間関係を大切に紡いでいきたい。

3－⑧

「詩を読んで思ったこと」

金子みすずさんの「こだまでしょうか、いいえ、誰でも」という詩を読んで思ったことは、何故難しい言葉は使っていないのに、何が言いたいのか理解ができないのだろうということだ。この詩の題名でもある「こだまでしょうか、いいえ、誰でも」という言葉で何を読者に伝えたいのか分からない。そこで私は、じっくりと詩を読んで考えた。

この詩が伝えたいことは、友達との関係を表しているのだと思った。一人が遊ぼうというと、誘われた人も遊ぼうと言って、ケンカが起きると二人とも馬鹿と言い合い、もう遊ばないと言うと遊ばなくなるが、二人とも淋しくなってごめんねと互いに言う。「こだまでしょうか、いいえ、誰でも」という言葉はこだまではなく、こうしたことが起きたら誰でもこのようなやり取りをしてしまうと言っているのだろうと考えた。仲の良い友達とケンカをしても、最終的に仲直りをするという、友達との友好的な関係が表されている。私も同じ経験をしたことがある。ケンカをして遊ばないと言っても、遊ぶ相手が減ってしまうと淋しくなって、仲直りをしたことがあった。

この詩を読んで、友達との難しい関係をこの少ない文字で表せることがすごいことだ。文を読んで難しいと思っても、自分の経験と照らし合わせると理解することができる。詩には、色々な使い方がある。

3－⑨

「温かい言葉で築く良好な関係」

「痛い、痛い、飛んでいけ。」この呪文は、幼少時の私にとって、絶大な効果を発揮していた。

毎日走って転んだり、手足をあちこちぶつかけたりと、怪我が絶えなかった私のそばには、幸い「痛

いよ。」と言ったら「痛いね。」と言ってくれる両親、祖父母、先生方がいてくれた。そのおかげで、私の痛みはいつの間にか半分になっていた。更に「痛いね、痛いね、かわいそうだね。」と繰り返し、こだましてくれ、心に寄り添ってくれたおかげで、不思議と私の痛みは消えていったのだ。もし「痛くないよ。」「泣かないよ。」と言われたら、痛さが減るところか更に泣いてしまっていたかもしれない。

金子みすずの詩「こだまでしょうか」は、特別な状況の時に限らず、楽しい言葉も、辛い言葉も、謝る言葉も、こだまのように自分に返ってくることを伝えている。投げかけられた言葉や思いに反応するのは、こだまだけでなく、全ての人の心だと教えてくれる。人は、優しい言葉をかけられると、優しい言葉を返したくなる。逆に悪口を言われると、悪口を言い返したくなるものだ。つまり、言葉は人を癒したり、時には傷つけたりしてしまう。自分の発言は自分に返ってくるのだから、安易に感情にまかせた発言はすべきでない。相手の立場や状況に寄り添い、言葉を選んで伝えることで、お互いに良好な人間関係を築いていけると私は信じている。何気ない言葉一つを大切にしていきたい。

3－⑩ 「優しさで優しさをつくる」

相手を思いやってくれる人と関係を築いていくべきだと考える。言葉は言葉をつくり、よりよい関係作りへと繋がるからだ。

東日本大震災の後、テレビで「こだまでしょうか、いいえ、誰でも」という詩を読んだCMが流れ続けた。このCMでは、優しい言葉で話しかければ相手も優しい言葉を返し、キツイ言葉でも同様だろう、ということが示されている。

私は2年の頃、友達と激しい言い合いに発展したことがあった。友達がキツイ言葉をかけてきて、それに乗っかるように自分も強い口調になった。いつも優しく接してくれている彼が強く言ってきたことに、私は心痛を感じた。きっと相手も同じことを感じただろう。優しい言葉をかけあうことがい

かに心温まることかを、この会話から学んだ。また、言葉は相手の言葉を変える力があるのだと実感した。

相手を思いやってくれる人と関係を深めていくべきだ。優しい言葉で話しかけてくれば、話しかけられた側は気分が良くなり、同様に優しい言葉を返すだろう。そうすればよりよい人間関係を結ぶことができる。この先に待っている高校生活。人間関係が上手くいくか不安だ。しかし、言葉が言葉をつくるということを思い出して、まずは自分から優しい言葉をかけたい。その優しさが、優しさで返ってきたら嬉しい。

3－⑪ 「後悔のない生き方」

東日本大震災当時、私は2歳だ。だから記憶はない。そして、このCMも記憶がない。でも多くの人が亡くなって、今も立ち直れずにいる人がたくさんいることは分かる。この震災によって、多くのものを失っただろう。

私達人間は、一人では生きていくことはできない。生まれてから死ぬまで、たくさんの出会いと別れを繰り返し、人と関わっていく。しかしその別れは、突然くるものでもある。その一つが、東日本大震災だ。よくテレビで特集などを目にする。特に、一人の女性の話が印象に残っている。それは、母親との最後の会話が喧嘩だったということ。鳥肌がとまらなかった。私達は、良い人間関係を築くためにも、喧嘩をすることはある。その時は、相手の気持ちなんて考えずに悪い言葉を投げかけるだろう。この喧嘩が自分の大切な人との最後の会話になるとも思えないだろう。必ず明日が来ることが、当たり前になっているからだ。いつこの世界が終わるのか、自分や大切な人の身に何が起こるかなんて誰にも分からない。だから、一瞬一瞬を大切にすることがある。

詩や名言というものに、私も何度も救われてきた。この詩のように、声をかければいつでも返って

くるわけではない。だから、日常的に相手を思いやって、慈悲の心を持ち過ごしていきたい。少しでも後悔を減らせるように。